2203　離島覚書（宮城県・金華山）

網地島より金華山を望む

令和４年４月 23 日

潮プランニング

金華山へは女川と牡鹿半島先端の鮎川の２ヶ所から観光船が出ている。女川からの便は「潮プランニング」という会社が運航しており、毎週日曜日だけ定期便が出る。ただしこの定期便は金華山での滞在時間が１時間 55 分と短い。神社を参詣するには十分な時間であるが、金華山山頂まで登る余裕はない。一方、土曜日には「金華山パワースポットめぐり」と称する臨時便がでる。ただし運航日は不定期だ。臨時便は金華山に３時間 40 分滞在するので、金華山山頂までの登山が可能である。また、金華山に宿泊することも可能でき、この場合は翌日曜日の定期便で帰ることになる。

鮎川からは「シードリーム金華山汽船㈱」と「㈱金華山観光」の２社が運航しているが、定期便はなくチャーターのみである。したがって一人旅には向かない。加えて石巻から鮎川までバスで１時間半ほどかかるので、自動車でないと不便だ。

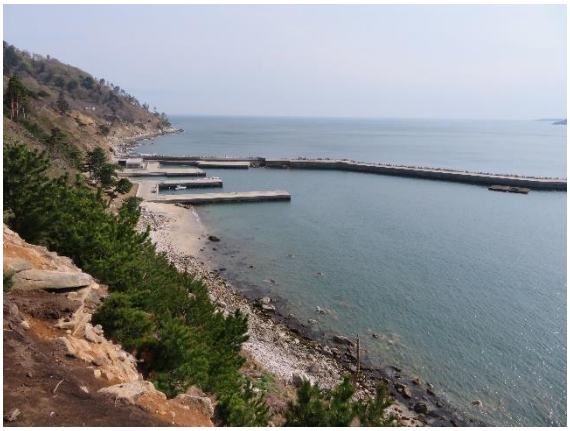
つまり、団体で観光船をチャーターする以外の方法で金華山に行くには、女川からの毎週日曜日の定期便を利用するか、土曜日の不定期便を利用する以外に方法はないのである。

この日は連休に近かったこともあり、インターネットで検索すると、潮プランニングの臨時便が出る日に当たっていることがわかった。臨時便はたまにしか出ないので、急遽、金華山に行くことにした。前日、仙台に泊まり、朝早く出発して石巻駅で途中下車、この日泊まる石巻グランドホテルにバックパックを預ける。石巻線に乗り換え、女川駅に着いた。金華山行の船の発着場は、出島（いずしま）、江島（えのしま）に行く場所と一緒なので、なじみのある場所だ。女川駅から坂を下り、土産物屋や公共施設、飲食店の並ぶ通りの一番下の魚屋で、昼食用としてブリの握り鮨を購入する。坂を下り切り、岸壁沿いを左に進むと船客ターミナルである。

潮プランニングの「アルティア」（19 トン）は定員 65 人。約 50 人が乗船したので、コロナ禍であるにもかかわらず客席はほぼ埋まった。パワースポット巡りは、往復乗船料とガイド、昼食込みで、5,400 円である。往復乗船料だけだと 3,500 円。特に神社のガイドも弁当も必要ではないので、後者を選んだ。ちなみにパワースポット巡りの弁当も鮨である。

臨時便は 11 時に女川漁港を出発した。港を出ると、出島、江島諸島を左手に、牡鹿半島を右手に見ながら、約 35 分で金華山の港に着いた。カイドの男性が金華山に着くまでの間、休むことなく解説を続けていた。

ちなみに後で知ったのだが、この日、北海道の知床半島では遊覧船「カズ・ワン」が沈没している。「カズ・ワン」は 19 トン、定員は 65 人だったので、「アルティア」とほぼ同型のＦＲＰ船で、全く奇遇としかいいようがない。



女川漁港の金華山行の乗り場（左）、金華山の地方港湾（右）

黄金山神社

金華山には立派な港が整備されている。島に漁師はいないので漁港ではなく地方港湾だ。港の近くの崖は至るところで崩れた跡があり、3.11 の地震の爪痕が残る。

金華山は面積 10.28 ㎞^{2}、周囲 17.3 ㎞で、宮城県に 10 ある離島の中では最も大きい。また標高は 444mでやはり宮城県内では最も高く、海上からよく目立つことから古くから「みちのく山」と呼ばれ、航海の目印になっていた。万葉歌人・大伴家持は、「すめろきの御代栄えむと東なるみちのく山に金花咲く」と詠んだ。

島には黄金山（こがねやま）神社の管理や宿泊施設の運営などを担うため 10 数人が島に滞在している。したがって集落はないものの無人島ではない。

港から黄金山神社まではきわめてきつい上り坂である。帰りの時間が決まっており、神社に着くまでに体力を消耗してしまうと、金華山登山に支障をきたすことになる。老人に配慮して神社のマイクロバスが停まっていたので、これに便乗することにした。

船から昼食用の弁当がバスに積み込まれ、席はほぼいっぱいになった。大きな銅製の鳥居をくぐり、急坂を登っていくと、約５分で参集殿（神社の宿泊施設）裏のバス停に着いた。山に登るのに弁当は邪魔になるから少し早めの昼食を食べることとし、バス停前のベンチに腰掛けて、買ってきた鮨を食べる。

黄金山神社は 749（天平 21）年に陸奥の国の国守・百済王敬福（くだらのこにきしきょうふく）が同国で採掘された金を朝廷に献上したことを縁に創建されたと伝わる。金山昆古神（ひこのかみ）と金山昆売神（ひめのかみ）を御祭神とし

て祀っている。

中世以降の神仏習合時代は弁財天を守護神として、金華山大金寺と称して信仰を集め、平泉の陸奥守藤原秀衡（ひでひら）、石巻城主葛西三郎清重などの時の権力者から多大な寄進を受けて繁栄したとされる。当時は女人禁制であった。また、出羽三山や恐山とともに東奥３大霊場の一つとして修験者が活躍、金華山信仰が各地に広まったといわれている。明治維新後の神仏分離令で黄金山神社として復活し、現在に至る。

昼食を食べ終わるころには続々と港から歩いてきた人たちがやってきた。手水舎で手を清め、30 段の石段を登って隋審門をくぐり、さらに 70 段の石段を登ると、本殿と拝殿が現れた。現在の社殿は 1897（明治 30）年に焼失後、再建されたものである。途中、何度も休んで階段を振り返る。金華山の山頂までは約１時間を要するというから先が思いやられる。

隋神門（左）、黄金山神社の拝殿と本殿（右）

金華山登山

12 時ちょうどに本殿脇から登山道に入る。奥の院登拝口と書かれた脇にちんけな鳥居が立ち、それをくぐると沢の水を貯める貯水池があった。神社で使う水は全てここから引いている。コンクリート製で、貯水量は 1,000㎥と書かれていた。

金華山は大部分が国有林である。山は環境省が管理しているが、3・11 の地震の影響で山崩れの場所がたくさんあるらしく、金華山への登山道以外は立ち入りが禁止されていた。

登山道は沢筋に沿ってつくられている。しかし沢は浅く、水量も少ない。沢の脇に石がごつごつとむきなしになった道で、わずかに踏み跡があるだけだ。ほとんど石の道だからきわめて歩きづらい。

東北地方には春が訪れたようで、木々は新芽を吹き始めていた。手すりのあるところは手すりにつかまりながら喘ぐように進む。後ろから来た男性に早々と抜かれた。頂上から若い女性が降りてきて５～６人とすれ違った。彼女たちは鮎川から来たのだろう。頂上までの距離を聞くと、途中の水神社が中間点あたりだという。

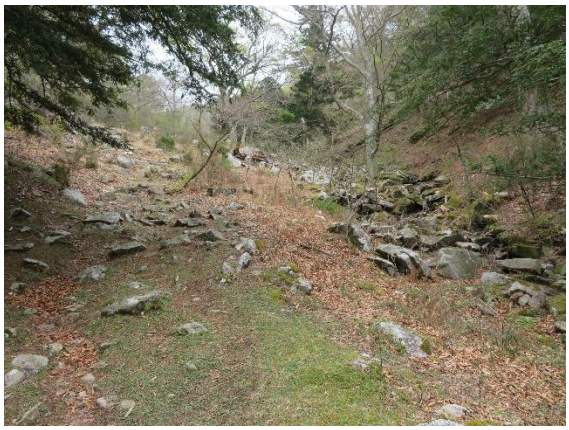
さらに歩くと、その水神社に達した。小さな社が置かれ、山道の両側に地蔵様が鎮座している。歩き始めてここまでちょうど 45 分かかった。ここは黄金山神社に水を供給する水源地のようで、水源の水が枯れることがないようにとの願いが込められて神社が建てられたようだ。

水源地を過ぎると沢は途切れ、歩きやすい山道になった。周りにはスギやヒノキが植えら

れている。突き当たると突然視界が開け、眼下に江島諸島が見えた。金華山を南北に貫く主稜に出た。八合目と書いてあった。登山道の左には太平洋が広がり、さわやかな風が吹きあがり、気分は大きく転換した。突き当りを左に進むと、山神社があるようだが、「危険」と表示され、立入が禁止されていた。

右手に進み、主稜を南に向かう。石段が積まれ、再び急な登山道となった。上の方に大海祇(おおわだつみ)神社の社が見えた。やっと目標が見えて一安心である。多くの登山道には頂上までの合目と距離が記されているのが普通だが、金華山の場合は８合目の表示があるだけで、距離の表示はほとんどなかった。あとどのくらい歩けば頂上に立てるかがわかれば、歩くことに張り合いが出るのだが、金華山ではこうした配慮がほとんどされていない。

13 時 04 分に金華山の頂上に立った。海抜は 444.9mであるから、０mから一気に約 450 m登ってきたことになる。黄金山神社からの所要時間は１時間強であった。港からだと約１時間半弱に相当する。「しま山 100 選」によると、片道約１時間 30 分となっており、何とか標準並みの時間で頂上に辿り着いたということになる。



浅く水量の少ない沢沿いの登山道（左）、水神社の小さな社と石地蔵（右）

山頂

金華山の山頂には大海祇神社が鎮座している。2011 年３月の東日本大震災で建物が半壊したため、2013 年に再建されたものである。

この神社は海上安全、大漁豊漁の守護神として漁業者の信仰を集めてきた。1922（大正 11）年に仙台市の伊沢平左衛門の寄進で建立されたと伝わる。この神社は、江ノ島（神奈川県）、厳島(いつくしま)（広島県）、竹生島(ちくぶじま)（滋賀県）、天河(てんが)（奈良県）とともに５大弁財天の霊地として知られているそうだ。

頂上から南に少し下ると、視界が開け、牡鹿半島の先端、網地島さらにその先に田代島が見えた。両島を写真に収める。この主稜を下ると、島の南端に至るが、やはり山道が地震やその後の豪雨で土砂崩れが発生したようで通行は禁止されていた。

再び山頂に戻り、東側に下ると休憩用のベンチとテーブルが置かれていた。ベンチに座り一休みする。ここから下ると、天柱石を経て、千畳敷の海岸に至るようだが、やはり通行は禁止されていた。

山頂付近に 20 分ほど滞在し、13 時 24 分に下山した。持参してきたペットボトルのお茶はすでに飲み干した。下山途中に清水石という場所があり、どうやらこの水は地下からの湧

水のようなので喉を潤す。沢水は野生動物が多いから病原菌や寄生虫などの危険性がある。湧水なら安全だろうと判断した。

黄金山神社に 14 時 12 分に着いた。下山に要した時間は 48 分であった。

神社の境内には、祈祷殿、祈祷所、金椿神社、恵比寿・大黒尊像、五十鈴神社、舞殿、銭洗所、神輿奉安殿など数多くの建物が建つ。また樹齢 800 年の欅の大木もあった。参集殿脇の裏参道を下る。

山頂から牡鹿半島、網地島、田代島を望む（左）、大海祇神社（左）

シカ

金華山には、中大型哺乳類としてニホンジカとニホンザルが生息している。シカは黄金山神社の近くでたくさん会ったが、サルには合わなかった。

神社から船着場に戻る途中で、坂を登って来る薬箱を抱えた女性に偶然すれ違った。明らかに観光客には見えないし、帰りの船の時間が迫っているのに逆の道を歩いてくるものだから、何か事情があるのだろうと思い声をかけた。

実は彼女はシカの研究者だった。十和田市にある北里大学獣医学部生物環境科学科の先生をしている岡田あゆみさんといった。学生を引率してシカの調査にやってきたようで、神社の参集殿に泊まっているらしい。

３男が北里大学の獣医学部に行ったことや知人の高橋弘さんが教授をしていたこともあり、彼女との話は島のシカから高橋さんのことへと飛んだ。高橋さんは水土舎創業当時三菱総合研究所にいて、会社の創業時には大変お世話になった方で、よく一緒に出張もした。その後、母校の宇都宮大学の副学長に選出され、さらに北里大学の獣医学部の教授になっていた。彼が亡くなったことは間接的に聞いていたが、岡田さんによると、定年退職後まもなく亡くなられたとのことである。大変面倒見のいい先生で、学生たちから大変慕われていたという。お墓は故郷の横手市にあるが、大勢の学生が墓参に訪れたという。「本当にいい先生でした」と岡田さんも尊敬していたようで、高橋さんには先生の仕事が本当に似合っていたのだなと感慨を深くしたものである。

島から帰って調べてみると、彼女は他大学の先生と研究グループを組み、ドローンを使ってシカの個体数を調査する手法開発をしていることがわかった。

金華山のシカは 1966 年以来、継続的に多くの研究者によって調査されてきた。最初に調査した伊藤健雄さんは、全島で 450 頭のシカが生息していると推定している（東北大学理学

部の博士論文)。そして金華山のシカは、神社周辺に生息する神社グループ、鹿山草地を行動域とする鹿山グループ、島の南西部から東斜面一帯にかけて行動する山グループの３つに分かれるとしている。このうち神社グループが最も高密度で、逆に山グループは最も低密度であった。

その後、金華山のシカは 1984 年と 1997 年の２回にわたる大量斃死を経て回復し現在に至るが、岡田あゆみさんが関わる上述の最新の調査では、429 頭を検出しており、金華山に生息可能なシカの数は 500 頭前後で推移しているようだ。広島県の厳島のように大勢の観光客がやってきて餌を与えることはないから、金華山のシカの生息数は基本的に島が供給できる餌の量に規定される。金華山が収容できるシカの上限は約 500 頭ということになるのだろう。

一方、サルの方も熱心に調査している人がいる。「宮城のサル調査会」に伊沢紘生さんという方がおられる。彼によると金華山には 250 匹のサルがいて、生息密度は本州の 10 倍と高く、６つの群れに分けられるそうだ。生息密度が高いことから、陸上の食べ物だけでは足りないため、岩礁の多い東海岸に遊動域をもつ４群は頻繁に磯に降りて、ワカメやフノリなどの海藻類、カサガイなどの貝殻を好んで食べていることを報告している。ちなみにサルが海産物を食べる例は、宮崎県の幸島（こうじま）という無人島でも聞いたことがある。

鹿の群れ（左）、北里大学獣医学部の岡田あゆみ先生（右）

山椒と芝

金華山に登る沢沿いを歩いていると、やたらと山椒の木が目についた。ちょうど新芽が出たばかりである。摘んでつぶし、匂いを嗅ぐときわめて良質の香りが漂う。ところどころ群生しているところもある。群生地には山椒以外の木はないので、新芽を摘むには非常に都合がいい。神社で山椒の葉の佃煮でもつくって売ればいいのではないかと思ったりもした。

金華山の沢筋にこれほど山椒が多いのは、棘があるためにシカが食べないからだ。他の植物はシカに食べられてしまい、結果的に山椒が残ったのである。この話を岡田さんにすると、山椒の木ばかりの場所もあるらしい。

千葉県鋸南町では一昨年、シカが島の特産品である水仙の球根を食べていることが発見されて大騒ぎになった。水仙の葉や球根は有毒なのでシカは食べないだろうと高を括っていたので、食害を受けたことがことのほかショックだったのである。シカが増えて食物が不足すればいままで好みではなかった植物も食べてしまうということがわかったのだ。

岡田さんにこの話もすると、金華山でも通常はシカが食べることのないマムシグサが最近は食べられているという。やはり沢沿いの道で目を出したばかりのマムシグサをたくさん見ていたから、マムシグサは毒があってシカは食べないのだろうと思っていたのだが、水仙と同様の運命にあるようだ。

神社の周りにはシバが優先する。シカの食圧に絶えず晒されているから、シバ以外の植物はシカが葉を食べることができない大木か、忌避する植物、柵で保護された木だけである。シカの食圧によって植物の遷移は退行し、草地はいつまでも草地のままである。金華山の頂上からも広いシバ地が確認できたが、草地はシカがもたらした典型的な植生なのだ。

長崎県の野崎島はかつて人が住んでいたが、今はシカの住む島へと変わっている。集落や段畑のあったところはシカによる食圧で芝生になっており、遷移は退行したままで皮肉にも古い集落跡をはっきりと見ることができる。シカが人の代わりに草刈りをしてくれるわけだ。

新芽を出す山椒の木（左）、シバで覆われた草地（右）

土砂崩れ

港の背後の高台はシカの食害を受けてシバの草地が続く。この草地に桜の木と思われる幼木が植えられていたが、シカに食べられないように周囲をネットで囲っている。シカには食べられないほど大きく育った桜の木が何本かあったが、ちょうど満開であった。

森林に震災前には桟橋付近に土産物店や民宿もあったようだが、約 20mと推定される津波によって桟橋もろとも破壊された。震災から半年後には台風 15 号が来襲し、その時の豪雨で金華山の各地に土砂崩れを発生させた。シカによる食害がなければ、大きく生長した木の根によって土砂崩れは抑制されるのだろうが、金華山ではシカの食害によって草地が多く、このことが土砂崩れを起こしやすくしているようにも思われる。

港に下る道路脇は急傾斜地で、至る所で土砂崩れを起こしていることは上述したとおりであるが、予算の関係か手つかずのところ、あるいはすでに修復工事を終了しているところなど様々である。

金華山の船着場は女川行と鮎川行に分かれている。鮎川行の桟橋には震災後つくられたと思われる石巻市金華山休憩所がある。女川行には何もない。金華山は石巻市に属することから手厚くされているのかもしれない。ただ休憩所にはトイレがあるだけで、だだっ広い建物内には、売店はおろか何もない。

今も爪痕を残す土砂崩れの跡（左）、修復された参道脇に崖（右）

鯨塚

黄金山神社に向かう参道の脇に「弔鯨魚碑」と書かれた石碑が建っていた。1917（大正６）年に鮎川を拠点に捕鯨を始めた東洋捕鯨㈱の社長・長岡十郎が建てたものである。

東洋捕鯨㈱が鮎川に進出し、捕鯨の拠点となるのは明治の終わりのころで、当時、鯨を解体した時の血などが、沿岸漁場を荒廃させ、地元の漁業に打撃を与えるとして反対運動が起こった。この鯨塚には鯨の血などを発酵処理して、農業用の肥料として開発した松田庄助という人の功績を称えているようなのだが、全文は解読できなかった。察するところ、鯨の廃棄物の有効利用によって捕鯨会社の現地進出が進み、同時に農業も潤うという一石二鳥の効果をこの開発がもたらしたのだろう。

島旅から戻り、石巻市役所の教育委員会に問い合わせたが、同委員会もこの碑文のことを把握していなかった。写真を送り、解読してもらうことをお願いする。

黄金山神社の鳥居（左）、鳥居の手前に建つ鯨塚（右）

「アルティア」は 15 時 15 分に金華山の港を離れた。金華山に泊まる人が７～８人いたようで、帰りの船の乗客は来た時よりも少なかった。予定よりも少し早い 15 時 45 分に女川漁港に着いた。港から坂を登って女川駅まで歩く。女川駅は無人駅で、売店もない。温泉水を引いた足湯があるようだが、閉まっていた。